
愛の力

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の力

【Nコード】

N7638D

【作者名】

peach-pit

【あらすじ】

歌手を目指している村上愛理^{むらかみあいり}。ある日、前の学校で同級生だった羽端尋人^{はばたひろと}と出会った。初めは友達だったものの、だんだん気になり始める二人。ある日、愛理は大怪我をしてしまう。そのせいで脳に障害を与えてしまい、記憶喪失に……。でも、その愛理に奇跡が起こり記憶が戻り、幸せに。その奇跡とは……。愛の力だった！！

オーディション

「村上^{むらかみ}さん。どうぞ」

「はい！」

私は名前を呼ばれたので部屋に入る。

私は村上^{むらかみ}愛理^{あいり}。

歌手を目指しています!!

「失礼します」

私は一礼をする。

「えっと・・・あなたは村上^{むらかみ}愛理^{あいり}・・・さんですね？」

「はい！」

「じゃあ歌ってみてください」

「はい!!」

ドアの近くにいた男の人が初めから持っていたマイクを私に渡してくれた。

私はそのマイクを口の近くに運んだ。

この歌で決まる・・・。

この歌で・・・私の将来が決まる。

私は口を開け、歌った。

3分後。

歌を歌いきった。

自分でも一生懸命やったと思う。

後は結果を待つだけ。

「はい。分かりました。ありがとうございました」

「ありがとうございました」

私はまた一礼し、部屋を出て行った。

「はああああ」

私は思わず深くため息をつく。

・・・合格したかなあ？

ドンッ

私はボーッとしていたせいで誰かにぶつかってしまった。

「…………ごめんなさい！」

私は慌てて謝る。

「いーよ。別にどこも怪我してないから」

・・・え？

この声・・・。

私は顔をあげる。

そこには見覚えのある男の子がいた。

「・・・え?! あなた・・・!」

私がぶつかった人は私の知っている人だった・・・。

出会い

「ななな・・・っ！」

私は口を開け、パクパクさせる。

「？」

相手は何が何だか分からず頭上にはてなマークを浮かばせている。

「なんで尋人ひろうどがココにいるのー?!」

私は思わず叫んでしまった。

みんなからの視線があつい。

「え?なんで俺の名前知ってんの?」

「ばか!忘れたの?村上むらかみ!村上愛理むらかみあいりだよ!!」

「村上むらかみ・・・?あー!!思い出した」

「なんでいんの？」

「え。俺もオーディション」

「へ？」

尋人ひろとがオーディション？

まさか歌手になるの？

似合わない。

プツ

私は笑いをこらえることが出来ず、思わず嘔き出してしまった。

「なんで笑うんだよ」

「別に。似合わないと思って」

「はあ？ おめー最低だな」

そう言って私のほっぺをつねる。

「いたたた。いたい！」

私は痛みのせいで涙が出てきた。

「そんなこと言うからだ。ばーか」

舌を出す尋人^{ひろうと}。

・・・相変わらずな奴。

「で？お前は？」

「私もオーディション」

「マジ？おめーもかよ」

笑出す尋人^{ひろうと}。

「な・・・っ！なんで笑うの?!」

「さっきのお返しだ」

ムカツとくる。

なんでお返しされなきゃなんないのよ!!!

ムカツクー。

「じゃ。あたし帰るから」

私はクルッと出口のほうを向く。

「あのさ!」

私はいきなり呼ばれたので驚きながら尋人ひろうとのほうを向く。

「ン?」

「アド交換しねーか?」

「・・・別にいいよ」

私たちはそれぞれアドレスを携帯に入力した。

「サンキュ。じゃーな」

「うん」

私たちは手を振り合い別れた。

お兄ちゃんの思い

私は家に帰った。

「ただいまあ」

普通の挨拶。

「お帰り。愛理^{あいり}」

声をかけてきたのは私の兄の隼人^{はやと}だ。

隼人^{はやと}兄ちゃんは大学生。

2つ上なんだ。

「ただいま」

「オーディションどうだった？」

「え・・・？なんで知ってんの？！」

オーディションのことは反対されると思い、家族の人には言っ

い。

はずなのに！

なんで知ってんの？！

「愛理あいりのことならなんでも分かるの！」

「すごい。隼人兄ちゃん、超能力者じゃないの？」

「そうだよ」

普通に即答する隼人兄ちゃん。

・・・へ？

「俺は超能力者だよ」

え？え？？

頭が混乱する私。

「う・・・嘘でしょ？」

「マジ」

どうしちゃったの？

まさか・・・。

「熱でもあるんじゃないの？」

「ねーよ」

「嘘だあ！」

私は隼人兄ちゃんに近づき、手を隼人兄ちゃんの額に近づける。

「なっ！何すんだよ」

「何って・・・。熱ないか見てるんじゃないの！！」

私は隼人兄ちゃんの額から熱を感じ取る。

・・・熱はない。

じゃあ、ホントってこと？

「愛理^{あいり}」

「え？」

腕を引っ張られた。

そのまま隼人^{はやと}兄ちゃんの部屋に連れて行かれてしまった。

そして部屋に入り、私は隼人^{はやと}兄ちゃんに体を押され、私の体はベッドに埋もれた。

「何すんの？」

「愛理^{あいり}……。好きだ」

「え？」

兄からの告白

「好きだ」

「へ？」

急に言われた告白。

それは私の兄からだった。

す．．．き？

どういう意味？

「冗談言わないで!!」

私は起き上がる。

「冗談言うわけねーだろ」

私が見てる隼人兄ちゃんはやとの目は真剣だった。

・・・やっぱり本気なの？

私は俯く。

「ははっ・・・。やっぱ無理だよな。俺ら兄妹だし」

「ごめ・・・んなさい・・・」

私の目からはなぜか涙が流れていた。

それを見た隼人^{はやと}兄ちゃんは動揺する。

「いやっ！その！な・・・泣くなよ」

私を泣き止ませようと必死で優しい言葉をかける。

だけど私は涙が溢れて来て、泣き止みたくても泣きやめられない。

「・・・」

急に黙り込んだ隼人兄ちゃん。

どうしちゃったのかな？

と思っていたと、肩を掴まれ、隼人兄ちゃんに抱き寄せられた。

「はや・・・！？」

「シ！。黙って」

「ン・・・」

私は黙った。

・・・隼人兄ちゃんの胸の鼓動が聞こえる。

私の耳、隼人兄ちゃんの心臓の近くにあるよ。

すごく聞こえる・・・。

隼人兄ちゃんの心臓・・・、トクントクンツて脈うってる・・・。

私の心臓と同じだよ。

あれ？

私は自分の頬に触れてみた。

・・・熱い。

なんでこんなに熱いの？

抱き寄せられてるから？

それとも・・・。

お兄ちゃんが好きだから？

兄に対しての私の気持ち

私の体は今お兄ちゃんに抱き寄せられている。

ただ抱き寄せられているだけなのにどうして顔が熱くなるの？

どうしてドキドキするの・・・？

「落ち着いたか？」

はっ！

私は隼人兄ちゃんはやとの声で我にかえった。

「う・・・うん！」

私は動揺してしまう。

隼人兄ちゃんはやとは体を離れた。

「やっぱり・・・ダメか？」

寂しそうな顔で問いかけて来る。

「・・・」

私は俯き、黙り込む。

・・・お兄ちゃんのことは好きだよ？

でもそれはあくまできつと兄妹愛という意味だよ。

「ごめんなさい・・・」

私は俯きながら小さな声で言った。

「そっか・・・。愛理^{あいり}」

「ん？」

私は顔をあげる。

「好きな奴いるのか？」

「え?!」

何で急にそんなこと?!

驚く私。

「い・・・! いないよ!...!!」

私は必死で首を横に振る。

「今いなくても、出来たら幸せになれよ」

真剣な顔で言う隼人^{はやと}ちゃん。

「・・・お兄ちゃんもね?」

「ああ」

お兄ちゃん・・・。

あなたの気持ちにこたえられなくてごめんなさい。

私は好きな人なんていないけど絶対幸せになるよ。

だから・・・お兄ちゃんも絶対幸せになってね・・・。

私はお兄ちゃんの部屋で眠りこんでしまった・・・。

結果

パアッ

太陽の光を私は浴びる。

「ん・・・」

私は重い目を開ける。

・・・あれ？

ココは・・・自分の部屋じゃない・・・。

あー・・・。

昨日お兄ちゃんの部屋で寝ちゃったんだっけ・・・。

カチャッ

「起きた？」

お兄ちゃんは部屋のドアを開け、私に話しかけた。

「うん」

私はベッドからおり、重い足を動かす。

向かった先は・・・ドア。

ギー・・・。

私はドアをゆっくり開ける。

「じゃあね」

「ああ」

部屋からすばやく出る。

・・・なんか。

さっぱりしてたな・・・。

なんとなく寂しくなる。

私は水でも飲もうと、階段をおりる。

リビングのドアを開け、入ったが誰もいない。

・・・まだ寝てるのかな？

コップを手に取り、水を入れる。

水がコップいっぱいに入ったところで水を口に含む。

水を飲み干し、コップを流し台に入れる。

「そうだ。暇だし新聞とってこよ」

私はリビングを出る。

玄関まで行きサンダルを履く。

玄関のドアを開け、ポストに手をかざす。

ポストに何か入っていた。

・・・なんだろう？

私は不思議に思いながらポストの中に入ってたものを取り出してみる。

・・・封筒？

茶色い封筒だ。

・・・私宛て？

封筒に “村上愛理様” と書いてある。
むらかみあいり

私は封筒の端を破り中身を確認する。

・・・え？

うそ！！

合格するなんて思いもしなかったよ！

「なんの騒ぎだ・・・？」

眠い目をこすりながらお父さんとお母さんまで外に出てきた。

「いや・・・。なんにもないよ」

「じゃあなんで大声出したんだ？」

「め・・・目を覚ますためよ！！」

嘘ついちゃった・・・。

きつと結果を聞いた瞬間断るに決まってる。

「そうか。ならいいけど・・・」

お父さんは納得したのか、玄関を開け家に入った。

お母さんもあとに続いて入って行った。

ふうゝ・・・。

思わずため息。

「危なかったな・・・」

「うん・・・」

ホントよかったよー。

♪～ピロピロピロ

ポケットに入っている携帯が鳴った。

私は慌てて携帯を開く。

・・・メールのようだ。

受信箱を開く。

・・・ひろと尋人からだ。

『今日会えね?』

「誰?」

ヒョイツと携帯を覗いて来るお兄ちゃん。

「前の学校の友達だよ」

「ふーん」

あっさりとした答え。

『いいよ』

私は返事を返す。

「もう戻ろ？」

「うん」

私はお兄ちゃんに手を引かれ家に戻って行く。

尋人の気持ち

私は家に入った後、自分の部屋に戻った。

そしてベッドに横になる。

・・・そういえば尋人^{ひろうと}からメール来てたな。

私はハッと思いだし、ポケットから携帯を取り出す。

携帯を開き、メールを作成する。

『いいけど?』

ピッ

送信した。

でも・・・どうしてこれから会えるのかな？

こんな朝早く・・・。

♪～ピロピロピロ

すぐに返事が来た。

私は受信箱を開く。

『じゃあ○×公園に来て』

『分かった』

私は送信し終わると着替え始める。

さすがにパジャマわね・・・。

Tシャツにスカート。普通の格好だ。

私はその姿で下へと階段をおりて行く。

「どっか行くん？」

声を聞いた瞬間ビクッと肩があがる。

振り向くとお兄ちゃんがいた。

「何その反応」

「び・・・ビツクリしたただけだし！」

私はなぜか逃げてしまった。

なんで・・・？

自分でもわからない。

いつのまにか公園に着いていた。

公園のベンチに尋人^{ひろと}がいた。

「よっ」

「うん」

私は尋人^{ひろと}の横に座る。

「どうしたの？」

「・・・結果どうだった？」

・・・結果？

何の？

言ってる意味が分からない・・・。

「え？」

「オーディションの結果だよ」

あゝ！！

そうゆう意味かあ。

「合格したよ♪」

私はにっこりと笑い、右手でピースする。

「そうか。俺も♪」

尋^{ひろと}人もピースする。

「マジ?! やったじゃん♪」

私が盛り上がっているにもかかわらず、ひろと尋人は俯いている。

「・・・ひろと尋人？」

私は首を傾げる。

ギュッ・・・。

すると俯いていたはずのひろと尋人が私の手を握っている。

私は尋人^{ひろと}に握られている自分の手を見て、尋人^{ひろと}の顔を見る。

尋人^{ひろと}の顔は真剣だった。

私の顔をジッと見つめている。

「ひろ・・・っ」 「愛理^{あいり}」

私の声と尋人^{ひろと}の声が重なった。

「好きだ」

「え？」

す．．．き？

私夢でも見てるの？

ついさっきもお兄ちゃんに告白されたばっかじゃん．．．。

これは夢。

そう．．．夢よ！

「う．．．そ」

「なんで嘘つかなきゃいけないーんだよ」

真剣だ・・・。

どうしよう・・・。

現実のことなのかな・・・。

「あの・・・っ。その・・・っ」

私は動揺してしまう。

「急でビビったか？」

「へ？」

少し笑いだした尋人^{ひろと}。

「冗談だよ」

「え?!」

私は目をぱちくりさせる。

「じょ・う・だ・ん!」

尋人^{ひろと}はニツコリと笑う。

冗談・・・?!

は?!

からかうのもいい加減にしてよッ。

どんどんイラだってくる・・・。

「冗談ってなによ・・・」

「え？」

「なにそれ・・・。冗談な気持ちで告白なんてしないでよッ！」

私は目に涙を溜めていた。

「愛理^{あいり}！ちがつ・・・！！！！！！」

私は座っていたベンチから立ち上がった。

「じゃあね。もう会えない……。さようなら」

私は走り出した。

「愛理^{あいり}!!」

私は尋人^{ひろうと}の声を聞かなかった。

……。いや。聞けなかった。

今まで信じていたはずの尋人^{ひろうと}に裏切られたから。

あんな人だとは思わなかったよ……。

事故

「愛理^{あいり}ちゃん」

「はい！」

私はマネージャーに呼ばれた。

「今日からこの歌練習しようね？」

「はい！」

・・・【本当の想い】

これが私のこれから歌う曲。

本当の想い・・・か。

わたしとおんなじ。

「愛理^{あいり}ちゃん・・・？」

私が悩んでいるのに気づき、首を傾げるマネージャー。

「え？あ。なんでもないです！！」

私は首を横に振る。

「ありがとうございました！」

1日目の練習が終わり、家に帰ろうとした。

だいぶん道を歩いている。

何分経ったかなあ・・・。

タッタッタツ・・・

後ろから足音が聞こえてきた。

この音を聞く限り走っているよーだ。

後ろを振り向いてみると。

ガッ

頭をなにか硬いもので殴られた。

ドサッ・・・

私は地面に倒れこんだ。

・・・いたい。

頭がズキズキする・・・。

なにで殴られたんだろ・・・。

ってか、誰なの？

♪～ピーポーピーポー

救急車・・・？

私・・・人生初の救急車に乗ってる。

はあ・・・こんなことで乗るなんて・・・。

それより・・・私死んじゃうのかな・・・。

まだ・・・彼氏つくってないのに・・・。

デートしたかったよお・・・。

記憶喪失

「ん・・・」

私は目を覚ました。

「ここは？」

白い部屋に白いカーテン。

私の体はベッドに横になっている。

ここって・・・まさか病院？

カチャッ

病室の扉が開いた。

「愛理^{あいり}？」

入ってきたのは見たことのない男性だ。

・・・誰？

「具合どうだ？」

なんで話しかけてくるの？

初対面なんだよ？

「愛理^{あいり}・・・？」

男性は私を見ながら首を傾げている。

“愛理^{あいり}”・・・？

愛理^{あいり}って・・・私の名前？

思い出せない・・・。

なんで病院にいるの？

何があったっていうの？

「あの・・・」

「ん？」

「私って誰なんですか？」

「え？」

男性は目を丸くしていた。

「なっ……。何言ってるんだよ？」

「あなたって……。私の知り合いなんですか？」

男性は顔を青くしていた。

「……やばいこと言っちゃったかな？」

「お……。俺は隼人^{はやと}だよ。お前の兄じゃねえか!!！」

「はや……。と？兄……。？」

私の頭は混乱している。

「マジで覚えてねえのかよ？」

隼人^{はやと}という人の声は震えていた。

「・・・記憶喪失」

隼人^{はやと}さんは眩いた。

記憶・・・喪失・・・？

記憶を失ったってこと？

そん な つ ・ ・ ・ 。

だから隼人^{はやと}さんのことも、私のことも覚えてないの ・ ・ ・ ？

記憶喪失での尋人との出会い

その後私は記憶が戻らないまま退院。

隼人^{はやと}さんに連れられて家に戻った。

「ここがお前の家だよ？」

「ここ・・・が？」

見たことのない家・・・。

ここが私の住んでいる家なの？

「さあ。入るぞ」

「う・・・うん」

私は隼人^{はやと}さんに手をひかれて家へと入って行った。

そのまま1つの部屋へと入った。

「ここは愛理^{あいり}の部屋だよ？」

「私の・・・部屋？」

「ああ」

ピンクのカーテンに白いベッド。

きれいに片づけられている部屋。

・・・ここが私の部屋なの？

全然覚えがない・・・。

隼人^{はやと}さんは何も言わずに部屋から出て行った。

♪～ピンポーン

チャイムになった。

ガチャッ

それと同時に部屋のドアが開いた。

私が振り向くとそこには男の子が立っていた。

「愛理^{あいり}・・・」

誰・・・？

私のこと知ってる・・・。

「この前はゴメン・・・。あれ冗談じゃねーんだよ！ほんとなんだよ！！」

この前・・・？

会ったの？

「あの・・・私、記憶喪失になってしまって・・・あなたのこと・・・覚えてないんです」

「え・・・?!」

男の子は口をポカーンと開けている。

「何で・・・」

「覚えて・・・ないんです・・・」

男の子はさびしい顔をする。

「俺は・・・ひろと尋人だ」

「ひろ・・・と?」

尋人^{ひろと}クンはこくりと頷いた。

「覚えてなくて・・・ごめんなさい」

「いいんだよ」

尋人^{ひろと}クンは私のほうに近づいた。

そして私の髪の毛を触る。

「これから思い出せばいいんだから」

尋人^{ひろと}クンはにこっと笑った。

私はどきっとしてしまった。

・・・どうして？

なんでドキドキするの・・・？

変な気持ち

私が記憶喪失になってから、尋人君ひろうとと毎日会うようになった。

今日も会う約束をしている。

待ち合わせの場所・カフェテラスに今私はいる。

・・・遅いなあ。

待ち合わせから15分経っている。

・・・どうしたんだろ。

「なあ姉ちゃん」

へ？

私は思わず振り返る。

すると変な男性が私の前に立っていた。

「な・・・なんですか？」

「なーにしてんの？」

「人・・・待ってるんです」

すると急に私の腕を掴む男性。

「なっ・・・」

「いーじゃん。どうせ彼氏でしょ？」

「ち、違います！」

尋人^{ひろと}君はただの友達だよっ！

私が男性の手を振り払おうとしても力が強くて無理だ。

「暇だろ？ いこーぜ」

「ひ、暇じゃないです！」

「いーじゃん☆」

私を椅子から立たせようとする男性。

「は……っ、離して下さい！」

私が叫んだ瞬間。

「何やってんだ！」

尋人君ひろとの声が聞こえた。

尋人君ひろとは小走りで近づいてきた。

「なんだテメー」

男性は尋人ひろとを睨む。

「こいつはおれの連れだ」

「なっ!？」

「俺が怒る前に立ち去れ」

ギロツと男性を尋人君ひろとが睨む。

男性は舌打ちをし、店から出て行った。

尋人君ひろとはふうつとため息をし、私の正面に座った。

「ひ……尋人君ひろと……？」

「ん？」

「私を……助けてくれたの？」

「ああ」

あっさりと答える尋人君^{ひろと}。

「どう・・・して？」

おそろおそろ聞いてみる。

「なんでって・・・」

尋人君^{ひろと}は少し考え、顔を赤くしだした。

「お前を守りたかったんだよッ！」

守・・・る。

私は顔を真っ赤にした。

胸も高鳴る。

「あ・・・ありがと・・・」

私と尋人君^{ひろと}は真っ赤。

カフェテラスで少し話した。

そして今日は用事があるので、帰ることにした。

帰り、尋人君^{ひろと}が私の家まで送ってくれることになった。

「今日はありがとう」

「いーよ」

ニコツと笑う尋人君。ひろと

ドキッとしてしまう。

私は手を振り、家に入った。

そしてそのまま部屋に入った。

私はベッドに横になった。

私・・・どうして尋人君ひろとにドキドキするんだろ・・・。

記憶が・・・

私はベッドから起き上がった。

・・・勉強しなきゃ。

私はベッドから離れ、机へと向かった。

そしてノートを出そうと引き出しを開けた瞬間。

私は変な封筒を見つけた。

・・・なんだろう？

私は不思議に思いながら封筒を開ける。

すると中から二つ折りの紙が出てきた。

私は紙を開く。

・・・手紙だった。

よく見ると尋人君宛てだ。
ひろと

なんで・・・？

私書いた覚えがないのに・・・。

私は文を読んだ。

ー尋人^{ひろう}。私は前に住んでいたとこであなたに会ったのは、公園だったね。私が好きだった人にフラれ泣いていた私を、ジョギングしていたあなたが私に気づき励ましてくれた。とても優しい言葉だった。それからどんどんあなたのことに気にしていました。でも、私はあなたに出会ってから3か月で転校。私はもうすこし前に会っていれば、もっもーつと話せたと思います。

でもある日、オーディションであなたにまた会った。2年も経ち、ちよつと大人びていたけどすぐ分かった。私の愛しい人だったから。尋人^{ひろう}……。私はあなたのことが好きです。

私はあなに出会ったのは運命だと思います。だって……。2回も出会いがあつたんだもん。私は……。そう願ってました。

好きです。尋人^{ひろう}……。――

……。これって、ラブレター?!

私^{わたし}って尋人君^{ひろう}のこと好きだったの?!

頭が混乱してきた。

頭痛がはしる。

頭が割れそうな痛みだ。

いたい・・・いたい・・・。

すると、頭にいままでのこと全部浮かび上がった。

・・・頭痛が無くなった。

今のは・・・記憶・・・？

私・・・記憶が戻った！

告白

私はラブレターを持って家を飛び出した。

走って走って・・・たどり着いたのは。

尋^{ひろと}人の家だ。

♪ピーンポーン

私は息切れしながらチャイムを押す。

カチャッ

「はい？」

チャイムの音で尋人^{ひろと}が出てきた。

「あれ・・・？愛理^{あいり}？」

尋人^{ひろと}ははてなマークを頭上に浮かべている。

「尋人^{ひろと}・・・。はい！」

私はラブレターを尋人^{ひろと}に渡した。

「何・・・コレ？」

「読んで」

「え？」

「いいから読んで！」

「わ・・・わーったよ」

尋人^{ひろと}は手紙を読み始めた。

みるみるうちに尋人^{ひろと}の顔は赤くなっていく。

「これ・・・って」

「ラブレターってやつよ？」

私はニコツと笑う。

「記憶・・・戻ったのか？」

「うん♪」

その瞬間、尋人^{ひろと}に腕を引っ張られた。

気がつくと抱きしめられていた。

「ひろ・・・っ」

「俺も・・・好きだ」

耳元で告白された。

私は顔を真っ赤にした。

「うん・・・っ♪」

私も抱きしめた。

もしかして・・・記憶が戻ったのは私と尋人ひろうとの愛の力かもしれないね・・・。

記憶・・・戻ってよかったよ・・・っ。

私・・・本当は冗談の告白されたときすっごく嬉しかったんだよ？

ありがとう・・・。尋人ひろうと。

――END――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7638d/>

愛の力

2010年10月24日01時52分発行